「上私都地区と大学生の交流がもたらした変化と地域共生社会への可能性」

〇発表者名　社福）八頭町社会福祉協議会　コミュニティ・ソーシャルワーカー　藤田亮二
上私都地区まちづくり委員会　宮崎　靖大

1.　問題提起

上私都地区は八頭町の中山間地域にある 7 集落で構成される地区で、自然豊かで穏やかな気風の住民同士のつながりが強い地区だが、少子高齢化が進み、生活・移動・医療など様々な生活課題を抱え、地域の活力の低下が危惧される。この課題は上私都地区に限ったことではなく、町内他地区、県下他市町でも同様である。このような中、上私都地区では町内でも先駆けて平成 24 年度に地域のつながりづくり・健康づくり・支え合いの充実を主な目的とした「上私都地区まちづくり委員会」を組織し取り組みを進めてきた。特に平成 26 年から始まった大学生との交流が、地域の活力や連帯感の向上、愛着・誇りの高まりなどの様々な好影響を与え、要介護高齢者や障がい者の社会参加のきっかけともなり、取り組みは現在も進化を続けている。これは今後の地域福祉の方向性であるわが事・丸ごと地域共生社会の実現にもつながるものであると考える。

2.　目的・方法

これまでの取り組みの経過を詳細にまとめ、その時々に関わってきた人物にインタビュー・アンケートを行い、どのように感じ行動していたのか、想いの変化、取り組みが進んでいくきっかけや原動力が何であったのか、取り組みを通じてもたらされた地域や大学生の変化とその要因を明らかにし、そこから導き出される地域共生社会に向けて必要な取り組み、地域の活力の向上について考察する。

3.　成果・展望

【上私都地区の概況】

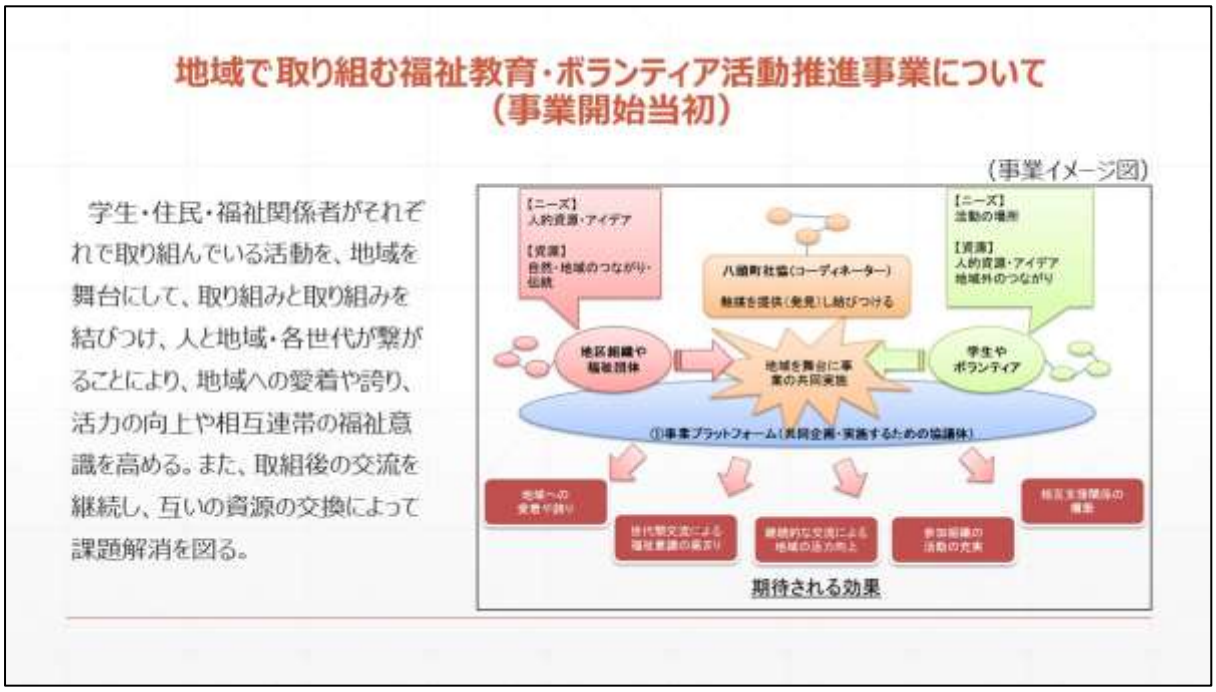
八頭町上私都地区は 7 つの集落で構成される中山間地域に位置する地区である。（人口 524 人・世帯数 186 世帯・高齢化率 44.8%／2017 年 4 月 1 日現在）主な産業は農業。特に奥に位置する 3 集落の高齢化は著しい。公共交通機関は町営バスのみで地区の途中までしか運行していない。穏やかな気風で地域のつながりは強い。平成 24 年度より八頭町地域福祉計画に基づく小地域福祉組織「上私都地区まちづくり委員会（以下まちづくり委員会)」を設立し、住民が主体となって住民同士のつながりづくり、健康づくりに取り組んでいる。

【平成 27 年以前の経過】

八頭町社会福祉協議会（以下八頭町社協）では設立当初からまちづくり委員会の取り組みを行政とともに支援してきた。平成 26 年に初めてまちづくり委員会で夏休みの子ども交流事業を実施することになり、八頭町社協の小学１～３年生への福祉・自然体験事業「優愛塾」に参加していた鳥取環境大学の一人の大学生ボランティア M 君へ「上私都の交流行事に参加してみないか？」と声をかけたのが最初のきっかけとなった。このつながりが翌年以降の交流事業へと発展していく。

【平成 27 年度の経過】

M 君が参加しているサークルと優愛塾で合同企画の事業を行う話が持ち上がり、多くの大学生が優愛塾に継続して参加してもらえるようになる。それと同時に八頭町社協で福祉教育プラットホーム事業（県社協補助事業：H27~H29 の 3 年間）に取り組むにあたり、今の大学生との活動と地域を結び付けることで各取り組みが活発になるのではないかと思い、まちづくり委員会・大学生へ声をかけて福祉教育プラットホームを設置し、合同で事業に取り組むことになった。



（企画～合同事業実施に向けて）

まちづくり委員会・大学生ボランティア・八頭町社協で交流行事の実施に向けた打ち合わせや事前交流を重ね、楽しみながら互いの呼吸を合わせていった。

大学生ボランティアと八頭町社協の連携を深めるために、まず 6 月に優愛塾での合同事業を実施し、その後も継続して毎月優愛塾にボランティア参加することで、参加している子どもたちと大学生の関係をつくっていった。上私都地区での合同事業は 10 月に設定。それまでのまちづくり委員会の夏休みこども交流会に大学生ボランティアが参加し上私都地区とも関わりを深めていった。10 月の交流会に向けた準備では、会場となる姫路公園を確認するのと合わせて、上私都地区の葉ワサビ畑を中心に生活の様子そのものを見学し、生産者である高齢者と交流をする初めての機会となった。

（合同事業実施）

10 月 24 日（土）姫路公園で行ったデイキャンプでは上私都の高齢者・まちづくり委員会・大学生ボランティア・優愛塾（とその保護者）・八頭町社協が参加。上私都の自然の豊かさを伝える体験活動を大学生ボランティアが企画・実施した他、食事も地元の食材を生かした内容になった。各取り組みでは高齢者から子どもたちまでできることをみんなで協力して行い、世代を超えて一緒に楽しく時間を過ごすことができた。

（実施後の展開～企画・準備）

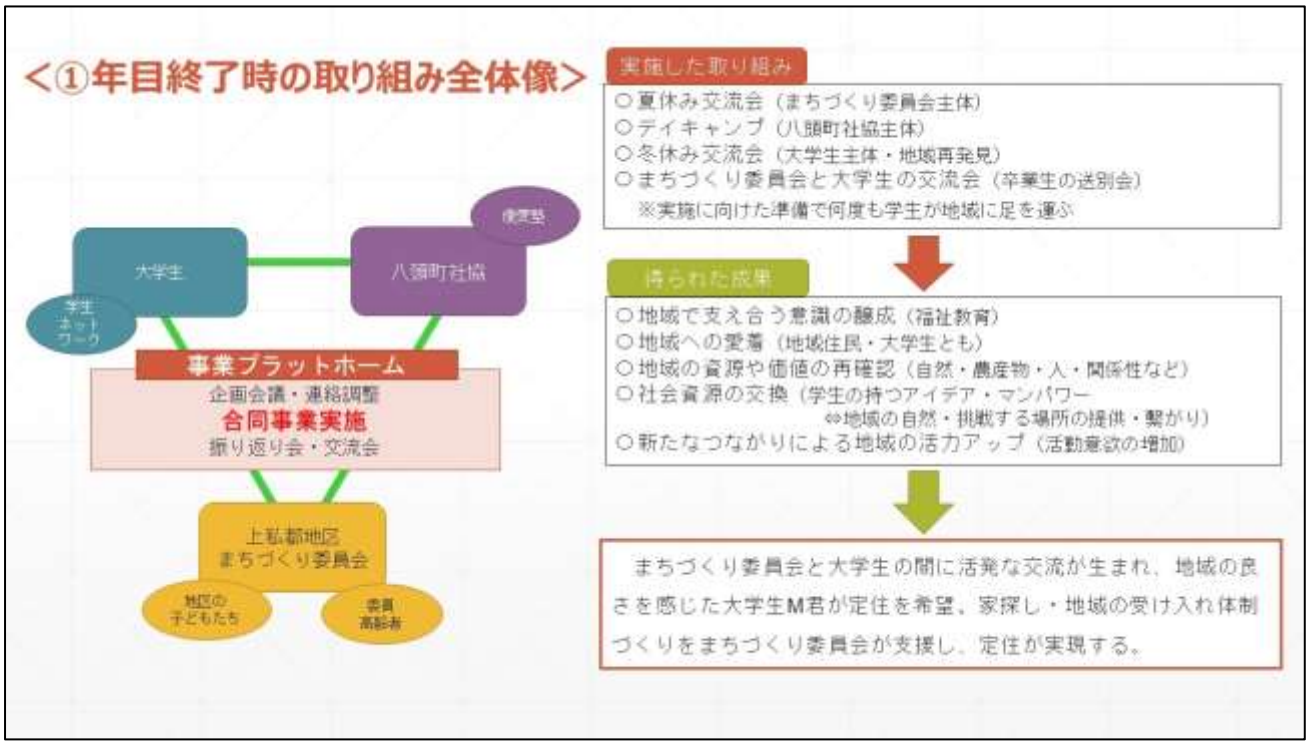
大学生ボランティアから「せっかくできたつながりをこのまま終わらせたくない。今度は自分たちが主体となり、上私都地区で交流行事を企画したい」と合同事業の振り返り会の中で提案。当初予定になかった冬休みの合同事業が新たに動き出した。前回の反省点であった、「子どもから高齢者までが幅広い年代で活動する、一体感のある取り組み」をコンセプトとして、行事の企画を大学生ボランティアに委ねることに。誰もが楽しめる内容をとディスカッションを進める中で、上私都の写真をたくさん撮ってその場でかるたを作る・各年代が混ざったグループを作ってゲームを進めることになる。上私都の写真を撮るために、大学生ボランティアが後日改めて地区を訪問。まちづくり委員会と大学生ボランティアですべての集落を回り、そこで大学生ボランティアの目線による上私都地区の印象に残るものを写真に収めていった。1 日かかりの訪問となったが、食事をまちづくり委員会でふるまってもらい、地区の様々な人とも交流し、大学生ボランティア・上私都地区の関係がより深まる訪問となった。

（冬休み交流会）

上私都地区の保育園児～小学生とその保護者・高齢者、まちづくり委員会、大学生ボランティア、八頭町社協が参加。参加した様々な年代が混ざるようにグループを作り、集落訪問で撮りためた写真を一緒に見て絵札に選び、その読み札をみんなで考えて作り、グループ対抗でかるたとりをするという一連の流れで、年代の違いを感じさせない一体感が生まれていった。また、写真を選ぶ作業を通して上私都の面白さや自然の豊かさを再確認する場面ともなった。そして、高齢者と子どもが同じゲームに参加できるようにと、かるたとり用の補助道具を大学生ボランティアが考えて、それをみんなで使うということが自然な形での福祉学習へとつながっていった。

（交流会を終えて）

きっかけになってくれた大学生ボランティア M 君が交流の中で自然豊かな地域の良さ・人のつながりの豊かさを感じ、大学卒業を機にそのまま上私都地区へ定住したいと希望。相談を受けたまちづくり委員会と八頭町社協が家さがし・地域の受け入れ体制づくりを支援し、無事定住が実現する。まちづくり委員会にも参加し、大学生ボランティアと地区をつなぎ、新しいアイデアや取り組みを生み出すキーパーソンとして活躍していくことになる。



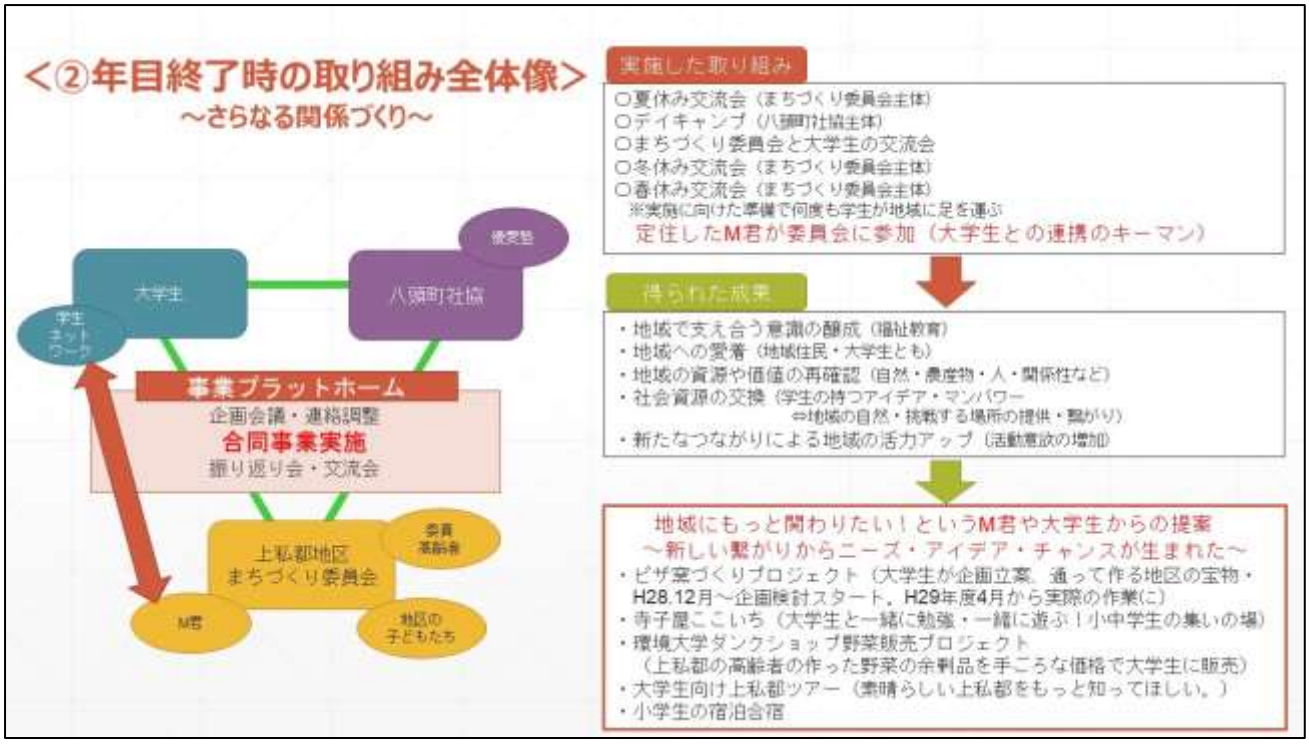
【平成 28 年度の経過】

（交流のリズムの確立と新たな合同事業の発案）

平成 27 年度に引き続き、打ち合わせ会を定期的に実施し、大学生ボランティア・まちづくり委員会・八頭町社協で夏・冬・春の年間通して交流行事を行っていく流れが出来上がっていった。上私都地区の子ども・高齢者は大学生たちが来ることに慣れて心待ちにするようになり、どの行事でも様々な年代が参加し、その橋渡しを大学生ボランティアが担うという形が定着していった。また、優愛塾やまちづくり委員会の各行事が、大学生ボランティアがやってみたいこと、やったことがないことをチャレンジする場としても定着していった。上私都もそのチャレンジを喜んで受入れ、我が子・孫のように大学生たちの挑戦を見守っていく。定住しキーパーソンとなった M 君発案の、上私都の野菜を環境大学構内のダンクショップで販売する野菜販売プロジェクト・まちづくり委員会拠点施設「ここいち」で子どもたちが大学生たちと一緒に勉強し、一緒に遊ぶ「寺子屋ここいち」なども試験的に実施し、交流だけでなく、地域の誇りや愛着が高まる取り組みも広がっていった。

（野菜販売プロジェクトは大学生が帰るときに、沢山の野菜を地域の方がおみやげに持たせてくれることからの着想である。）

そんな中、“大学生が気兼ねなくこれからも続けて上私都に来てくれるようになってくれば…” という上私都の思いと、学生たちの“上私都でもっといろんなチャレンジをしてみたい” という想いが打ち合わせ・交流・反省会と会を重ねるごとに徐々に想いが合わさって、合同でピザ窯を作るというアイデアへとつながっていった。“通って作る地域の宝もの“というコンセプトのもと、大学生たちで集まってアイデアを練り、それをさらにまちづくり委員会とも検討しと、一つのものを作るためにこれまで以上に密に打ち合わせを重ねて、実現に向けて準備を進めていった。



【平成 29 年度の動き】

（つながりのシンボルの完成）

これまでの打ち合わせ・交流のサイクルに加え、平成 28 年度に計画を練り上げたピザ窯づくりが着工。すべての工程をまちづくり委員会と大学生が一緒に手作りすることにこだわって進めていった。技術が必要な場面では、左官職人だった上私都の高齢者に指導を仰ぎ、必要な工具なども委員会メンバーが家から持ち寄って、大学生たちだけでは実現が難しいところを上私都が協力し、上私都地区のシンボルを一緒に作り上げていった。紆余曲折を経ながらも 8 月 24 日にピザ窯は完成。上私都地区運動会や高齢者の交流行事でお披露目を行った。ピザ窯の取り組みを進めるうちに、興味を示した委員会以外の住民から協力の申し出があり、完成後もピザ窯の活動をきっかけに活動に参加する人が現れ、徐々にまちづくり委員会のつながりのシンボルとして受け入れられつつある。

（大学生と地域の交流の深化）

上私都をめぐる上私都ツアーを大学生向けに実施。史跡や神社仏閣などを集落住民と一緒に回り、地区の歴史などもレクチャーを受けたこのツアーは大学生・地域に好評。次は自分の集落に来てくれるのだろうか？という期待感も広がった。地域の誇りや愛着を表現する場、これまで上私都に上がってきたことがない大学生のきっかけづくりの場として定着が期待されている。

野菜販売は大学祭で大学生が中心となって実施。野菜をきっかけに上私都を知ってもらうという意図も込められている。大学生が直接まちづくり委員会や地域住民と調整して野菜を集めており、自然と交流が深まるような取り組みとなっている。

（上私都のまるごとみんながつながる地域へ）

平成 29 年度からは交流行事にさらにつながりを広げるために新たなアプローチを進めた。

まず、大学生ボランティアのリーダー二人が上私都地区まちづくり委員会交流特別委員として参画し、上私都地区と大学生ボランティアの関係はさらに近づく。交流に関わる行事の際はすべて参加し、一緒に活発な意見交換を行っている。

次に、中学生へのアプローチを進めた。これまで交流行事に参加していた小学生が中学生になってからも引き続き寺子屋ここいちに参加があり、このことは取り組みが地域に根付いていることを感じることとなった。また、中学生は大学生たちと一緒に活動することに刺激を受けている様子であった。中学生が一緒に活動することは新たなつながりを広げていくきっかけとなると感じ、秋の交流事業に向けて中学生実行委員を募集。この中学生実行委員には大人たちがまじめに楽しく上私都のことに取り組んでいる姿を子どもたちにも見てほしいという想いも込めている。初年度参加できた中学生は１名だけとなったが、ピザ窯完成時に行った上私都を盛り上げるアイデアを集めるワークショップでは自分の思いをしっかりと

表現し、委員会に新たなエネルギーを与えてくれた。また、M 君の提案により、まちづくり委員会の取り組みをエコの観点からとらえなおし、とっとり環境杯にエントリー。中学生 3 人と M 君、まちづくり委員会副委員長とでプレゼンテーションと寸劇を行い、優秀賞を獲得している。

当事者参加を進めるきっかけとなったのが、Csw のかかわった八頭町社協の手話講座だった。講座の修了生が自発的に集まって行っている手話勉強会の存在を知り、フォローアップ講座を開催して取り組みを応援。上私都在住の聴覚障がいのある W さんが社協行事に参加される際はそのグループに手話ボランティアとして協力してもらい、その後のフォローアップ講座のゲスト講師として W さんを招く…こうした一連のやり取りのなかでお互いに関係を深めていった。現在そのグループはやず手話の会として活動している。また、以前から社協の交流行事に参加されている上私都の要介護者（車いす利用）A さんに、まちづくり委員会の行事に参加してほしいと考え、４年前～５年前に幾度か相談していたが、当時は受け入れ態勢や機運がそこまでにならず、提案のみで終わっていたものがあった。

こうした交流の中で培われた大学生たちとの信頼関係、様々なことを受け入れることができる雰囲気、中学生の活動への参加、シンボルとしてピザ窯、社会資源の創出…地域の力が充実してきた実感から、W さん・A さんもこの取り組みに一緒に参加してもらうことができる、そこで 3 年目の取り組みは上私都の丸ごとみんながつながれることをテーマに進めていくことになった。

（上私都まるごと交流会の実施と地域の変化）

11 月 12 日に行なわれた上私都まるごと交流会では、上私都に住む子ども・高齢者・A さん・W さん・委員会・その他ピザ窯を通じてつながった地域の人たちと大学生ボランティア・手話ボランティアが参加。大学生の企画による上私都の食材にこだわったご当地ピザを地区の方と一緒に作り、ピザ窯の周りでは男性委員を中心にピザ窯に火を入れ、たき火でジビエを焼き、スウェーデントーチで一斗缶での炭づくりなどのアウトドア、子どもたちは作業しながら大人とも遊ぶ、それぞれが場所を固定せず、いろんなところを回って話し、作業し、驚き、笑う。そんな場面があらゆるところで見られた。また、必要な道具や薪など、まちづくり委員会のメンバーや地域の人たちが「これも必要だろう？」と率先して持参されるなど、委員会・参加者が“みんなが集まるこの場を良くしよう”という気持ちで関わっていると感じた。

A さん・W さんは、時には周りの手助けを受けながらも、他の皆さんと一緒に同じように時間を過ごし、できることを担い、そこには分け隔てはない。合間に手話ボランティアグループによる手話歌の披露と簡単な手話指導を行ったところ、W さんが指導者として参加者全員が手話を学ぶ体験になった。これも予定していたことではなく、W さんが進んでその役を担っていただいたものである。また、同じ地域に住んでいる W さんの同級生が、保育所以来の再会だと喜び、肩を組み合って、「これからも交流に出て来いよ」と声をかける場面も。障がいのある方がどれだけ地域社会の一員として参加できていなかったのか、この取り組みを続けて、広げていくこと、当事者と一緒に過ごすことの大切さをあらためて感じる出来事だった。

最後はみんなで協力しての干し柿づくり、今度は高齢者が指導役となり子どもたちや大学生など若い世代に伝えていく。鈴なりになった干し柿が出来上がる冬にもう一度みんなで集まって食べようと約束して交流会は閉会した。

終了後の振り返りミーティングでは、まちづくり委員会・大学生ボランティアから、この取り組みにより起こった意識の変化が感じられる発言が次々とあった。「障がいのある方もこうして当たり前に受け止める姿をみて、これが普通のことなんだなと改めて感じた」「地域で過ごしている〇〇さんにも参加してもらえればよかったのに」「他にももっと地域で介護を受けて過ごしている人、障がいのある人もがいるので、もっともっと参加してもらえるようになったらと思う」また、まちづくり委員会に対して「今日は本当にあの人たちに来てもらえてよかったと思う、ぜひこれからも受け入れてあげてほしい、お願いします。」と地区の方からお願いされる場面も。福祉意識はこうして、当事者との関わり・ふれあいによって変化し、高まっていくものなのだ、福祉学習は難しいことを勉強しようとするのではなく、一緒に関われるあたりまえの場面をたくさん作ることだと、この取り組みを通して実感した。この経験は今後のまちづくり委員会の活動の幅を大きく広げるものになると思われる。

＜ ③年目終了時の取り組み全体像＞

～ALL上私都　子どもから高齢者まで　丸ごとみんながつながる地域～

実施した取り組み

- ○夏休み・冬休み・春休みの交流会
- ○上私都まるごと交流会（ピザ窯を活用）
  上私都にこだわった上私都のみんなが参加する交流会
- ○まちづくり委員会と大学生の交流会
- ○ピザ窯づくりプロジェクト（H29年度4月から製作中）
- ○寺子屋ここいち（大学生と一緒に勉強・一緒に遊ぶ！小中学生の集いの場）
- ○環境大学ダンクショップ野菜販売プロジェクト
  （上私都の高齢者の作った野菜の余剰品を手ごろな価格で大学生に販売）
- ○大学生向け上私都ツアー（素晴らしい上私都をもっと知ってほしい。）

目　標

- ○地域で支え合う意識の醸成（福祉教育）
- ○地域への愛着（地域住民・大学生とも）
- ○地域の資源や価値の再確認（自然・農産物・人・関係性など）
- ○社会資源の交換（学生の持つアイデア・マンパワー
  ⇔地域の自然・挑戦する場所の提供・繋がり）

～新しい繋がりをさらに広げる！深める！～

- ○大学生リーダーが地域交流特別委員としてまちづくり委員会に参加
- ○地区の中学生に上私都デイキャンプ企画段階から参加してもらう
  （地域への愛着・本気で楽しむ大人の背中から学ぶ・未来の自分を考える）
- ○介助や支援が必要な人（要介護高齢者・障がい者等）も参加できる地域の居場所へ（手話ボランティアも活躍）

【考察】

取り組みにより地域・学生双方にどのような変化があったのかを、取り組みの経過とインタビュー・アンケートによる当事者の視点を元にまとめると次のとおりである。

＜大学生との交流による上私都の変化＞

①取組の変化

・関わるメンバーの仲間意識の高まりと協力体制の促進

・地域の資源・価値・面白さの再発見と活用

・取り組みに対する外部評価

②意識の変化

・高齢者・子ども・障がい者など当事者参加の促進（友人や仲間として）

・あたりまえに誰もが地域で関わり合い、支え合う意識の広がり

・地域への愛着や自信と誇りの高まり

・大学生や若者を受け入れ、育み、挑戦を応援する気風

・住民の新しい取り組みに対する意欲の向上

・地域で活躍する大学生の姿から地域の子どもたちが学ぶこと

③繋がりの変化

・M 君の移住（活動のキーパーソン）

・世代間交流の促進（次世代育成と地域の歴史や先人の知識・技術を伝える機会）

・繋がりの広がりに伴う地域の活力の向上（定住した M 君や大学生が繋がりの橋渡し）

＜上私都との交流による大学生の変化＞

・上私都地区や上私都の人達への愛着（地域の温かいつながりの中で過ごす経験から）

・意欲の向上（活動を受け入れてもらえる場を得たことと様々な挑戦から）

・福祉意識の向上（子どもへの関わり方・加齢に伴う変化・障がいに対する理解の促進）

・社会経験の充実（人との関わりや地域との調整、伝統文化、生活技術）

上私都を表す一言（大学生の視点）

ぬくもり・元気・笑顔・安心できる場所・コミュニティ・楽しい所・1 日訪れるだけで、第 2 の故郷になれる地域・家族・日本のふるさと・アクセスしやすい”楽”

このような変化が交流を重ねる中で生まれ、そのたびに活動の幅が広がり、新たな小地域活動の創出やピザ窯づくりの原動力となっていった。そして新しい活動がさらに互いの変化をもたらすという好循環をもたらしていると考えられる。

取り組みを進めていくうえで重要だったのは、時間をかけて互いに接点を持ち続け、信頼関係を構築していったことである。その信頼関係を土台として、新たな取り組みが展開し、取り組みの広がりがさらなる地域の変化を促していった。

また、もう一つ重要だったのは、コーディネート役の存在である。まちづくり委員会集落支援員・M 君・大学生リーダーがそれぞれの活動を調整し、各活動をつなぐ役目を Csw が担っている。この連携のもとに大学生が上私都に度々訪れることで、愛情をもって地域で育みたい若者たちという意識になっていっ

た。現在では大学生の存在そのものが上私都の様々な行動を引き出し、変化を促す原動力となり、大学生自身も住民の人柄の良さや温かいつながりの中で過ごすことに魅力を感じ、様々な人と関わること、期待されて様々なことに挑戦する機会を通して成長する場となっている。

こうした取り組みが大学生・まちづくり委員会の地力を高め、平成 29 年 11 月のまるごと交流会につながった。この取り組みで得られたものは、「福祉意識とは、当事者との関わり・ふれあいによって変化し、高まっていくもの」であり、「福祉学習とは一緒に関われるあたりまえの場面をたくさん作ること」である。子どもから高齢者・障がい者まで様々な人が関わる場を持ち、信頼関係を築き、互いに影響し合いながら地域の力を高めていくことが、地域共生社会の実現に必要な取り組みの一つではないかと考える。

そして、上私都地区の「活力の向上」とは、人と人が関わり合うなかで、「互いに“良くしたい・大切にしたい”と思い、相手の為に人や物が活発に動き出すこと」である。

【展望】

これまで培ってきたつながりや活力、信頼関係をもとに次のような取り組みが実現できればと考える。決して無理をせず、これまでと同様に着実に地域の力を積み上げて、さらに多くの住民の参加のもと、皆の愛するふるさと上私都を大切にしていきたい。

〇来年度以降の取り組み案（短期的視点）

・各シーズン交流会行事

⇒要介護者でも障がい者でも「誰でも」受け止めることができる交流の場の拡充

・大学生を対象とした上私都ふるさと便（米・野菜・果物）

・上私都の自然を活かした特産品づくり

・上私都ツアーの充実

・週末移住・大学生のふるさと寄宿舎

・男性の秘密基地

⇒男性が気軽に参加できる機会・地区の応援隊としての発展を期待

・毎週日曜フリースペース(お菓子提供：子ども無料)

⇒大学生と上私都住民(子どもから大人高齢者)が集まる空間の提供

⇒よりオープンにすることで多世代が集まり話をするきっかけをつくる

⇒多くの人が集まり話すことで「新しいこと」へのきっかけづくりになる

・上私都かわら版　⇒ここいちの活動をより知ってもらい、参加・参画を促すための一つの方法

〇これから(長期的視点)

上私都地区は学生とのつながりを通した活動から、仲間意識の高まりと協力体制が拡充されているといえる。また、より多くの人・世代が集い話をする場所（交流行事など）をつくることで地域課題解決へのヒントや議論が生まれる可能性が高くなるといえる。

それらのきっかけや組織体制をつくることで、「地域愛に溢れた住民」を主体とし、持続できる上私都（長く住み続けられる、安心した暮らし）を、ときには学生の力を借りながら、議論し実行できる地域を目ざしたい。